

氏名	郷 戸 夏 子
学位の種類	博 士 (学術)
学位記番号	甲 第 2 2 0 号
学位授与年月日	2 0 2 0 年 6 月 3 0 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	太平洋を横断するクエーカーの平和：戦前・戦中・戦後における エステル B. ローズの活動を中心に Quaker Peace Making Across the Pacific: Esther B. Rhoads and Her Work Before, During and After World War II
論文審査委員	主 査 教 授 ロバート エスキルドセン 副 査 教 授 小檜山 ル イ (東京女子大学) 副 査 教 授 高 澤 紀 恵 (法政大学) 副 査 教 授 菊 池 秀 明 副 査 教 授 那 須 敬

論文内容の要旨

本論文は、第二次世界大戦前後におけるフレンド派宣教師エステル・B・ローズの日米における救援活動を検討し、ローズ及びフレンド派の平和主義の特質と日本への影響を明らかにしようとするものである。

第一章では、フィラデルフィアにおけるフレンド派の発展と日本人との関わりを考察した。アメリカの建国以来、ペンシルバニア州はフレンド派だけでなく、他宗派にも宗教的に開かれた土地であった。そのため、フレンド派をはじめ、さまざまな人々が集まり経済的にも発展していった。特にフィラデルフィアはペンシルバニア州の中心であり、19世紀中頃に日本の政治家や留学生も多く訪問する都市であった。フレンド派のモリス家やエルキントン家、ローズ家は日本人との交流が見られた。彼らは明治以降、日本への訪問や日本人との交流を通し、日米におけるフレンド派のネットワークを構築していった。そして、1885年に日本へ宣教師を送るにあたり、フィラデルフィア・フレンド婦人海外伝道協会はこのネットワークを活用し、宣教師を日本へと派遣するに至った。

第二章において、フレンド派の初代宣教師ジョセフ・コサンドの時代から、ギルバート・ボールズ、エステル・B・ローズと3人の宣教師を中心に日本とアメリカにおけるフレンド派の活動を検討した。海外経験が豊富な津田仙と日本経験の豊富なウィリス・ホイットニーが日本で、コサンドの手助けをした。しかしコサンドの伝道方法は、日本人にフレンド派の信仰を伝えきれず、結果的に日清戦争を通して、宣教師の辞任へと至った。次にギルバート・ボールズは普連土女学校の基礎を固めた宣教師であった。またボールズは日本人と共に大日本平和会を結成し、平和運動を展開した。1917年には第一次世界大戦が勃発し、これまで分裂していたアメリカのフレンド派がアメリカ・フレンズ奉仕団（以下、AFSC）を結成し、ヨーロッパでの救援活動にあたった。AFSCの結成は、当時ヤングフレンズとして活動していたローズにも影響を与え、来日の布石となった。1917年の来日以来、ローズは日米を行き来し、知識や見識を深め、どちらかの国に偏ることなく、等しく日本やアメリカを見るまなざしを養っていった。また関東大震災での救援活動は、その後のローズの日米における救援活動の第一歩となった。

第三章では、第二次世界大戦中の日系アメリカ人に対するフレンド派の救援活動を、ローズの活動から考察した。真珠湾攻撃の翌日にはカリフォルニアに到着したローズの行動力と今後の予見は、ローズのこれまでの経験が可能としたと考えられる。そして、長期にわたる日本での活動で培ったローズ日本語能力と人々への接し方、まなざしは現地で奉仕活動を行う際の欠かせない要素の一つであった。このことからローズは、能力の面でも、人間性の面でも日系アメリカ人への奉仕活動を行う適切な人物であった。AFSCの職員として、アメリカの東部大学への転学を希望する大学生へのインタビューやホステルの開設、日系一世との交流など、ローズの活動は机に向かうだけではなく、常に現地に向かい、一人一人の人間と向き合う活動であった。終戦間際、ローズは、フィラデルフィア伝道局の代表者とともに国務省のジョセフ・グルーと面会した。このことはローズがミッション・ボードの日本部門の中心におり、信頼を得ていたことを示している。このような人物であったからこそ、ローズは戦後AFSCの駐日代表として、再び日本に戻り、ララ救援物資の責任者となったと考えられる。

第四章では、戦後AFSCの駐日代表として再び来日したローズの、ララ救援物資における活動を中心に検討した。ローズは、唯一ララの結成時から終了まで駐日代表として活動した人物であり、彼女がララの活動において中心的な役割を果たしたことは明らかである。ローズの日記からは、戦前からの変化を目の当たりにしながらも、精神的に日本での活動を模索するローズの姿が見え、日本人の友人との交流を通して、日本の状況をより深く知っていったことがわかった。日米の「交渉役」としてララ物資

の分配や管理を担当したローズは、自らの足で孤児院や乳児院、未亡人の施設などを施設を訪問した。そして、何が必要とされているのかを確認し、すぐにAFSCの本部に連絡をおこなったことが書簡から明らかとなった。このことはローズが、子供たちなど最も弱い立場の人々に目を向け、彼らの状況の改善に努めていたことがわかる。救援物資に加え、精神的な充足感を与えるために、クリスマスプレゼントも計画された。このような配慮は、AFSCが戦時中の日系人に対しても心がけた点であり、ローズはアメリカでの経験を日本でも応用し、救援活動の重要な点であると考えていたことが明らかとなった。

終章においては、各章を要約し、エスター・B・ローズの平和主義の実践と日本への影響について述べ、今後の課題と展望を加え、本研究のまとめとした。

論文審査結果の要旨

2020年5月20日、ロバート・エスキルドセン、菊池秀明、那須敬、小檜山ルイ（東京女子大学）、高澤紀恵（法政大学）各教授からなる博士論文審査委員会の審査が開かれた。審査では、冒頭に郷戸氏から論文について概要的な説明が行われた後、審査委員会から個別に質疑応答が行われた。

フレンド派（クエーカー）の女性宣教師であるエスター・B・ローズの個人史的背景と活動の足跡を丹念に辿りながら、戦前、戦中、戦後を通じて継続したローズの日本人・日系人との交流、教育事業、支援活動を分析した好論文であった。

論文の中で浮かび上がったローズ像の中でも特に印象的だったのは、クエーカー思想に立脚した「平和主義」という信念を持ちながらも、戦争に突き進んだ日本を頭ごなしに批判・否定せず、苦難の中にある相手として手を差し伸べることのできた柔軟さと迅速な行動力であった。1940年にアメリカに一時帰国するまで、ローズは普連土学園や日本人信者が直面した軍国主義の抑圧について熟知していた筈であるが、これらに対する批判や葛藤は私信などの史料にも一切現れないのか、疑問に残った。

一方、ローズが戦中に在米日系人の救済にコミットしたことは、日中戦争での日本軍の暴力行為や日米関係の悪化といった、抜き差しならない対立や、批判しても出口のない問題に際して、あえて「第三の道」に取り組むことで平和や相互理解の道を切り拓くべきであるとローズが考えていた可能性を示唆する。もしこれがローズの言う「信仰に生きる亀」の生き方であるなら、分断と対立が深まる現代世界を考える上でも有意義な歴史的事例となるかも知れない。

フレンド派の日米交流については、吉野作造ら日本の大正デモクラットによる中国知識人との交流が長期継続しなかったことと比べて、ローズにみる持続的な情熱は対照的である。論文前半では、宗教的信念ゆえに分裂をくり返した米フレンド派の歴史が描かれているが、なぜこのような背景からローズの「柔軟な」姿勢が生まれてきたのかが疑問として残った。

中間報告時において指摘された問題箇所が多くが改善されていることが確認されたが、なおも誤字や表現を改める必要のある箇所が複数指摘された。この他に審査委員からの批判点は以下である。

まず論文全体のフォーカスがどこにあるのかが明確でないという指摘がなされた。米フレンド派の歴史、日本のキリスト教史、日米関係史といった複数の領域にまたがる人物の生涯を追ったことは本論文の評価すべき点であるが、それゆえに主軸が弱

く、議論に物足りなさを覚えた。また、ローズが他の宣教師や教育者たちと比べてどのような意味でユニークな存在であったのか、特に20世紀はじめにおける他の女性宣教師の事例や、アメリカ女性史の先行研究での議論との関係において何が言えるのかが、明確ではなかった。また、AFSCAへの報告書、家族への手紙、自伝、厚生省史料など、様々に異なる史料の中でローズが選んだ言語や主題の違いに配慮した議論が必要だという指摘もなされた。

日米サイドから集められた一次史料は、本論文の大きな研究成果であったと言える。とくにAFSCのAnnual Reportについては、今後もさらに詳細な研究が期待される。排日移民法に対する日本側の反応について、機関誌『愛の友』を用いた分析も、ローズ自身の発言と共に価値あるものであった。

審査委員会はオンライン会議（Zoom）において2020年5月20日10時10分から11時40分まで最終口述試問を実施し、引き続き審査委員による最終判定を行った。その結果、提出論文は博士論文に値するに十分な内容を持ち、また学位申請者が自立的で高度な研究能力を有することを認めて、全員一致で本論文を博士論文として合格と判定した。